

学期レポート 2011 年秋学期

BOSTON
UNIVERSITY

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業

第 4 期生 武田 太一



2年目のボストン

ボストン大学に入って2年目になった。1年目は新しい環境や、ボストン独特の手話表現、気候、東海岸ならではの顔ぶれ(西海岸と違ってヨーロッパ系が多い)、など全てにおいて慣れるのに精一杯であったが、2年目になってようやく自分のペースで行動出来るようになった。いくつかのバイトも並行しながらの学業生活ではあったが、特に切羽詰まったスケジュールでもなかったのが幸いである。

昨年は12月になるとほとんど雪の毎日であったが、今年は不思議なほどに雪がなかった。お陰で大学に行くのは楽であったが、やっぱり雪がないとボストンらしさを感じられないのが悔やまれる。まだまだチャンスは残っているので、さらにボストン生活を極めていきたいと思う。

秋学期の講義

この秋学期では4クラスを受講した。それぞれのクラスは以下のとおりである。

- DE577 Instructional Strategies and the Deaf 聾児への指導法
- DE572 Psychology and the Deaf 心理学と聾
- DE575 Language and the Deaf Child 言語と聾児
- DE692 American Sign Language V アメリカ手話 5

	月	火	水	木	金
8:00AM				8:00-2:30	8:00-2:30
11:00AM		11:00-2:00	11:00-2:00	TLC ボランティア	TLC ボランティア
0:00PM		研究室 アルバイト	研究室 アルバイト		
1:00PM	1:00-4:00				
2:00PM	研究室	2:00-3:30	2:00-3:30		
3:00PM	アルバイト	DE577	DE577		
4:00PM	4:00-5:00 ランゲージ リンク				4:00-5:00 ランゲージ リンク
5:00PM	5:00-6:00 研究室 アルバイト	4:00-7:00 DE572	4:00-7:00 DE575	4:00-5:00 ランゲージ リンク	
6:00PM	6:30-8:00				
7:00PM	DE692				

DE577 聾児への指導法

聾学校あるいは聾プログラムに適した学習指導案(Lesson Plan)を作成する方法を教わるクラスである。教育従事者向けに学習指導案のサンプルはインターネットでも入手できるほど簡単で楽ではあるが、そのほとんどが聴児向けに作られたものである。聾児に適した学習指導案を見つけるのは困難であり、自分たちが独特で作成していくしかない。アメリカ手話と書記英語を並行して習得していくというバイリンガル教育の考えに基づき、アメリカ手話を使った動画教材や、手話と英語を組み合わせた課題の考案などクラスを通して議論を交わしてきた。バイリンガル教育が導入されて以来、聾児の学力が向上しているという。これは聾児が第一言語として手話を習得し、その第一言語が第二言語である英語習得の大きな役割を担っているという理論からである。

学習指導案のフォームはタイトル／学年／科目／期間／目的／目標／教材／流れ／評価から構成されており、特に目標がこの学習指導案における大きなポイントになっていると思う。生徒がどのようなスキルを身につけることが出来るか明確にしておく必要があり、細かいものとなっている。またこの学習指導案を作成すると同時進行で教材もいくつか作成してみた。太陽系について説明した動画や、アメリカ手話を記号化した辞書の作成など良い経験になった。これらは来年以降の実習にも活かされるので、ぜひとも実践してみたいところである。

DE572 Psychology and the Deaf 心理学と聾

この学期で一番理解するのが難しいクラスであった。障害者とは何か、その中で聾者とは何かという見方について議論したり、聾者文化に聴者は触れることができるのかなどあらゆるテーマについてクラス内で議論を交わした。一見優しそうな講義に見えるかもしれないが、あらゆる理論や見方について紹介があり、それを理解するのが難しかった。自分が印象に残っているといえば、白人と黒人の脳みその容量に差はあるかという実験で、それぞれの頭蓋骨に例えば小石を入れてどっちの方が多く入ったかというのがある。最初は両方とも同じぐらいの量であったが、白人の方の頭蓋骨をいったん振ることでかさを減らし、さらに小石を入れられるようにしたという報告がある。(お茶の葉をお茶缶に入れるとき、いったん底を叩くことでさらに入るようにするのと同じ原理である。)これは白人側がいかに黒人に対して自分たちが有利な存在であるかを見せつけるという傲慢さが伺える。現代は黒人に対する差別は薄れてきているものの、障害者も含めてまだまだ格差は残っている。

聾の場合は耳が聞こえないということだけで敬遠される存在ではあるが、もし耳が聞こえなくても、声を出して喋ることが出来るのであれば手話は必要なくなり、聴者との距離が縮まることができる。しかしこの距離が聾者にとって大事なことなのだろうか。また聾者はマイノリティに属しており、自分たちだけのテリトリーというものがある。このテリトリーはいくつもの層からなり、一般の人々が触れることが出来る範囲、手話関係者だけが触れられる範囲、家族だけが触れられる範囲、同じ聾者だけが入り込むことが出来る範囲と狭くなっていく。この話を聞いた時、CODA(聾の親をもつ聴の子)ですら入り込むことが出来ないテリトリーもあるということから、血の繋がった家族とはいえ、聾と聴ということだけで決定的な違いが生じることを改めて感じた。

DE575 Language and the Deaf Child 言語と聾児

聾児がどのように言語獲得していくか、また認知発達がどのようなプロセスを経て発達していくのか見ていくクラスである。聴児の幼少時から周囲からの音声言語による言語刺激を受けながら言語獲得していく課程は聾児にも同じことが当てはまる。ただし、音声言語を視覚言語である手話である必要がある。しかし、聾児の多くは聴者家庭に生まれることから言語発達がどうしても遅れがちになってしまうという現実である。これに関しては早期支援の拡大が求められている。

このクラスでは言語学だけでなく心理学に関する話もいくつか出た。日本で発達心理学などを受講した経験があり、同じような話が出たのだからいざいずれにしてもうろ覚えだったため、日本の大学時代にもっと学んでおけば良かったと悔やまれる。(そもそも情報保障の問題が大きかったのかもしれないが。)しかし、改めていろんな理論の話聞くことで、それらの理論がいかに聾児の発達に絡んでいるかということが良く分かる。特に心の理論(Theory of mind)の話で他人が何を考えているのか察する能力が成長と共に身についてくる。特に聾児の方が発達しやすいようである。これは手話がサロゲート(Surrogate: その人になりきる)という要素を含んでいるからではないかという議論などを交わした。

DE692 American Sign Language V アメリカ手話 5

アメリカ手話のスキル向上について、使用域(Registers: 講演、日常会話あるいは物語などの ASL を使う場面)に応じた手話の切り替え、健康問題に関する手話表現、教室における様々な科目に応じた手話表現の練習や分析などを行うクラスである。これまでにいくつかの手話動画を分析したり、自分の手話動画をブログボードに投稿してフィードバックをして再び投稿したりなど自分の手話技術の向上に臨んだ。今まで自分が練習したことのあるトピックは「赤ずきん」「鎌状赤血球症」「嵐のメカニズム」など様々であり、今まで以上に自分の手話スキルが上がったと実感している。

II LC におけるボランティア

ボストンから車で 30 分ほどの Framingham(フレーミングハム)にある The Learning Center for the Deaf(聾学習センター)にて毎週木曜と金曜にボランティアに行っていた。幼稚部で年長クラスの普通クラスと重複クラスの両方を交互に担当させていただいた。1日の流れを大まかに説明すると、まず朝のおやつから始まり、朝の会、アクティブセンター、外遊び、昼食、読書、ASL、ヨガ、プロジェクトという流れになっている。時々体育館で体育したり、ASL ストーリー(日本の聴者でいうと絵本読み聞かせにあたる)を観たりなどもする。自分の役割というと、クラスの進行は先生やアシスタントが中心に行うので、生徒とともにそれを見てお手伝いしたり、園児同士のケンカを仲裁したり、外遊びで他のクラスの生徒も混じって一緒に遊んだりなどである。ここで興味深いのは、同時に講義で言語発達について学んでいるため、5歳児とは言えグループによって傾向があったり、個人差があったりなどである。例えば一般的に女児は男児よりも言葉の発達が優れているというが、確かにその通りである。女の子たちの方がはるかにおしゃべりで、いろいろ話しかけて来たりする。男の子たちの場合は体を使った遊びが多く、会話をすることは少ない。だが、男の子の方でも会話能力が発達している同士が出会うとおしゃべりになったり、そうでない組み合わせだと遊びになる傾向になるなど、子ども同士の組み合わせで変わって来たりする。ここの幼稚部ではなぜかは分からないが、男性教員が全くいない。そういう意味もあってか、抱っこして欲しい子どもがよく寄ってくる。子どもの中では家庭で父親がいないのも珍しくはないので、学校における男性教員の役割も重要ではないかと思う。